

庭の番人くふゆく

光、生命のいぶき



土橋 光子

「雪になります」 天気予報を聞いただけで、寒いと体の方が言ってしまう
す。草も木もどこかカチツと堅い感じです。門松を外した町がなんとなくせわ
しくなりはじめました。

今日はそれでもぼっかりとした和らかい日射しで、庭の木々がキラキラして
いる朝です。六時、夜半から忙しく走りまわった霜爺さんに、おいてゆかれた
霜の子たちが、枝先き迄ぎっしりと並んで静まり返っています。太陽がやっと
近所のお宅の屋根の間から小さな庭に、光を送り込んでくれました。日向と日

蔭を作ってくれる頃になりますと、枝々の先からキラッ、キラッと光の交響曲の音出しが始まります。霜は光を反射して、少しずつ動きはじめました。キラッと光る度に形が変わっていくようです。七時、並んでいた霜は寄り添って集まり、一粒の玉のように透明の雫を連ねて首飾りになりそうです。枝の形にならって輝いていたと思うと日の当たる場所から、そっと消えてなくなっていくようです。

冬の自然は、葉も枝も、土も空気もみんな冷たく凍りつきそうです。私が幼かった頃、早起きの父のどてらの中に抱かれて庭へ出ると厚い椿の葉を一枚ちぎって手の平にのせてくれました。葉っぱが銀色のビロード仕立ての霜の洋服を着ていた事を、懐かしく思い出します。私が思い出にふけている間に、霜はどこへ消えてしまったのでしょうか。空気の中へ？ それとも木の皮へもぐって幹の中へ？ きっと両方です。朝がすすみ、日が高く昇りはじめると、木の中に溶けこんでいった霜の子達は、太い幹に集められ、根から吸い上げられた栄養と混ざりあっておいしい水に変わります。またもとの枝にもどっていく活動がはじまるのだと思います。

葉を落とした枝には小さい花芽が堅い萼に覆われて顔を出しています。初春、初日の出、初詣、等々初めてと言う意味では、枝に並んだ花芽達も古いも

のは一つもありません。寒く冷たい冬の間から、新しい生命の芽が、間隔をとって枝を埋めています。桜の木は沢山の花の生命を守りながら枝をひろげ、狭い庭の空間を一人じめにして立っています。

朝の道掃きは、生垣の青木のからびた落ち葉と、誰かが捨てていった空缶、吸いながら紙くず等が集められるだけで、寒く淋しい時が多くなりました。

そんな或る朝、「おばあちゃん。」と北風の子どものように走ってきてくれる女の子たちが、裸木の影をとおして日溜まりになっている場所で、片足を上げて、

「こんなに、私の足、大きい！」

「私のも！」「私のも！」

と、三、四人で手を胸に組み、ポーズをとって、自分の足の大きな影と、私の顔を交互に見てニッと笑っています。太陽にちょっと温めてもらうと、

「あったかくなったよ、早くいこう！」

「そうね、大きな足になったから、早く学校につくかもね！」

と私もニッと笑い返して見送りました。悲しく淋しかった心がやわらいで、冷えた手を揉みながら家に入りますと、我が家の白猫が冷たいガラス戸に体をす

り寄せて、自分も外へ出たいと甘え声を出して、待っています。その声で私の朝は急に忙はしない一日のはじまりとなります。でも今日は気持ちのよいはじまりです。

猫との散歩は建物にそって庭をひと廻りするだけです。彼が立ち寄る場所は大体決まっています。自分のテリトリー内へ他家の猫がこなかったか？ 友達の野良猫たちはこなかったかと嗅いでまわるのです。決まった木の幹で爪をとぎ、木登りをし、桜の木の根方に積み上げてある、コンクリートの敷石の上から、塀に飛びあがって隣屋敷を眺めてひと休み。首輪につけられた長い紐をチョンと引かれると、フワーと怒りながらも仕方なく下りてきます。濡縁の日向に腹這って又ひと休みです。十分ぐらいでしょうか？ 家に入る前に足を拭かれ、ころがった体の埃をハタハタ叩かれると、又、フワーと毛を逆立てるのです。これで猫との朝の仕事が終わります。

野鳥たちはどうしているでしょう？ 私が朝寝坊をした日は大変です。雀、ひよどり、雉鳩たちが裸木の枝に並び、ひよどり等は凄声で鳴きたてながら、空の餌台をカタカタとつついて呼び立てるのです。「ごめん！」と言いなから、パンくず、脂身、リンゴ等を細かくぎざんだものを置いてやりますと、強い者順に食事をすませ、満ちると枝に移り、毛づくろい等をして移動してゆ

きます。六時、十時、十二時、十四時、十六時、と餌台には一日の食べ残りに新しいものが加えられています。塒ねぐらに帰る前にお腹を満たします。餌の世話は虫の冬籠りの時が主です。

生きているもの全てが、夜明けと共に活動をはじめます。裸木で枯れたように見えるもの、土にへばりつくようにしている苔類、野鳥や犬猫、人間と、小さな庭を囲んで、朝の光と共に空間は恵を受けて一日の生活がはじめられます。この一瞬ひしんがあることで、遠い未来につながっていくのだと思います。

私達はこのような自然の仕組の中に創られて存在するのです。この仕組を大切に守り育てていく責任が人に課せられていると思うのです。人には出来ることと、出来ないこと、していいことと、いけないこと、考えられることと、られないこと等々、沢山のきまりがあります。その時に相応しいことを楽しみながら探して、共に生かし合うことを分けあえたら、大変幸せなことだと思います。

桜の木を中心にして、周りに生きているものたちのことを四回にわたって報告させていただきましたことを感謝しております。

小さな庭にも梅が咲く季節です。まだ歌えない鶯も山からおりてきます。光は眠っている生命を呼び起こし、霜柱に浮かされた地表にもうはこべの新芽が顔を出しています。

(元・武蔵野相愛幼稚園)

